

武蔵野市第五期長期計画・調整計画市民会議
(第2回)

議事録 (要旨)

日時：平成26年6月17日(火)
場所：武蔵野市役所 412会議室

1. 開会（午後7時）

2. 前回会議録の確認

（委員による確認の後、議事録（要旨）について確定した。）

3. 議事

（1）事務局説明

1) 将来人口推計について

（第五期長期計画・調整計画策定の基礎資料とするために作成している武蔵野市の将来人口推計の速報について説明した。）

（2）「健康・福祉」分野について

（「平成 21 年版地域生活環境指標」第三部 近隣都市比較をもとに、基礎データについて説明した。）

【A委員】私は、健康・福祉の分野では、家族介護支援事業の充実に重点を置きたいと思っています。親の介護を経験した私としては、これからふえるであろう老老介護や親1人子1人世帯の人への、より一層の配慮が必要だと思えます。被介護者には住みなれた自宅で余生を過ごしてもらいたいというのが家族の愛情ですが、介護にまつわる悲しい結末に至ることのないよう武蔵野の手厚い施策を希望します。

介護者は、生活を支えるために仕事をやめることは基本的には難しい状況だと思えます。仕事を続けながら被介護者とともに暮らせるのが、本当の意味での福祉充実都市です。

また、介護人材の不足も問題になっています。介護の仕事がきつい、安いではなく、きちんとした対価が払われるよう行政側からも働きかけをしてほしいと思えます。

未来を見出しにくい在宅介護・看護には、介護者の精神的なケアも必要です。

【B委員】私も、介護する人の負担が大きな課題だと思えます。新聞に「介護鬱」という言葉が使われていました。介護している人の3割近くは鬱に近い症状が見られるという調査もあります。そういう方たちの支え合いの仕組みをつくって、介護者あるいは家族介護をされている方たちが個別に相談するだけでなく、同じ体験を共有している人同士が集まって、悩みを分かち合えるといいと思えます。子どもの分野では、月に1回コミュニティセンターで親子ひろばがあり、市の方がいらっしゃって、必要に応じてアドバイスしたり、相談機関につなげるということをなさっています。介護分野でも、市と社会福祉協議会のような地域の福祉の会が一緒になってコーディネートする形をとってはどうか。

災害時要援護者支援事業は、災害時の安否確認に特化されていますが、地域の人が月に1回ぐらい、介護者宅を訪ねて行って、介護者家族とも日常的なつながりを持つ形をつくることで、介護する人、される人の孤立を避けられるのではないかと。まちの中でいろいろな人とつながりながら暮らしていくということが、介護する人にとっても、支えられる感じを持つことにつながります。要介護者支援事業をもう少しグレードアップした形で取り組んでほしいと思えます。

【C委員】アパートに住んでいれば上下左右の人、戸建てに住んでいれば周りの家の人と最低限の話や挨拶ができる地縁関係というんでしょうか、例えば独居老人の方を「このごろ見かけませんよね」とい

う話を誰もしないのは、とても危ない状況だと思います。私の住んでいた団地でも、独居老人が亡くなって、2週間、誰も気づかなかったことがありました。隣組のようなものをつくる必要はないと思いますが、やはりご近所の方と普通にお話ができるような関係がないといけないと思いますね。

【D委員】うちは94歳の祖母の介護をしています。大正生まれの祖母は、他人の迷惑になるのが嫌だという意識が強いです。それは介護時に身内の負担が多くなってしまうということに繋がります。家族の負担が少なく、介護が必要な本人にもわかりやすく使いやすい公のサービスをもっと提供していただきたい。武蔵野市の、退職したら地域の活動をどうですかという形の事業の中でも、介護を受ける場合のサービス内容がわかるような情報提供をしていただければと思います。

介護は、トイレもリハビリも、体験してみないと負担がわかりませんので、予行演習できる形があるといいと思います。

【E委員】介護の問題は、長期計画の重点施策であると同時に、国の政策である介護保険事業が地方に移管されていく関係からも、新たな課題が出てくると思います。予算の関係で、サービスの低下が起こるのではないかと心配もされています。サービスの悪化で、6割以上は状態が悪化して介護度が上がり、お金がもっとかかるという調査もあります。介護支援の充実は、喫緊の課題です。

重点施策の「予防を重視した健康施策の推進」、これこそが市町村自治体としての役割が発揮できる施策の1つだと思います。日の出町では、70歳からの医療費を無料にしたところ、75歳以上の1人当たり医療費が減少したという報道がありました。予防という観点からも、重症化する前に受診を促す有効な施策だと思います。

子ども医療費についても、武蔵野市はかなり先進的です。効果的なデータも出ているので、今後も継続してほしいと思います。

【F委員】予防の段階で支え合いができる状況をつくっておくことが必要だと思います。私の住むマンションでは、月1回ふれあいサロンといって、1階の幹事室で10~15人が集まって、マージャンをやったり、花札をやったり、歌ったりして、安否確認というわけでもないですが健康を確認し合うシステムができ上がっています。

中国、韓国に旅行すると、おじいちゃん、おばあちゃんが外に出ていてびっくりします。日本でもゲートボールをやっている方がいらっしゃいますけれども、中国、韓国はもっと多岐にわたっていました。大勢が地面に水で習字をしているんです。20年ぐらい毎日やっていて、「足腰も丈夫だよ」と笑っていました。

公園を活用することで、子どもたちとの異世代の交流の場にできるのではないのでしょうか。

【G委員】65歳以上の市民に元気な人が多ければ、介護保険を利用する人の比率は、低くなります。事前配付の「武蔵野の福祉」の65歳以上の人口を分母に、介護保険認定者を分子にして計算すると、平成20年は18.5%だったのが平成24年は20%まで上がっている。放っておくと、どんどん上がっていきます。要介護になってからももちろん大事ですが、なるべくなら介護の認定者に入らないでほしいわけです。具体的に数値目標をつくって、20%を死守するというやり方のほうが、わかりやすいと思います。

介護されることになる前が問題で、武蔵野市は便利なようでも、買い物が結構不便です。建築指導に

もかかわるかもしれませんが、自営業者が高齢になって廃業した後は、例えばコンビニを誘導するということができれば、少しずつ便利になっていくと思います。

ところで、いただいた資料を読んで、コミュニティ協議会、地域フォーラム（仮称）、コミュニティ研究連絡会、地域連携協議会がそれぞれ何を目的として、何をしようとしているのか全く理解できません。この言葉を市として公式に使うのであれば、例えば市報で周知するなどしてほしい。目的は何で、誰に相談すればいいのか、自分の困っていることは、どこに行っても聞けばいいかわからないと、概念ばかり並んでいて、非常に使いにくいです。

【A委員】私も、よくわからなかったです。そもそもこのコミュニティの概念が、昭和46年のコミュニティ構想に基づいているということですが、もう何十年もたっていますし、この構想に基づいてコミュニティを形成するのは難しいのではないかと思います。

【D委員】この中間提言の会議に参加していました。参加者はコミセン関係者が一番多くて、次に多いのが福祉関係者でしたが、同じ問題を共有している方も結構いました。今までコミュニティがうまくやってきたと言われていますが、実際に参加している人の割合は、ごく少数です。それを変える1つのあり方として、地域フォーラム（仮称）があるといいという意見がありました。ただ、地域フォーラムをつくればうまくいくというわけでもないで、さまざまな意見を頂戴して、形づくりをしっかりとしていきたいという内容でした。また、市民の皆様が参加しやすいように、行政が教育機能を持ちつつ進めることができるというのではないかと話もありました。

【H委員】「市民が主体」と、あちこちに出てくるのですが、よくわからない。それは当たり前だろうというところから具体性が出てこない、前へ進まない段階に来ていると思います。

会社勤めをしていても投票に行かない人が結構います。住んでいるだけ。子どももいないし、地域は関係ないと言っている人は、二十数年後には1人でぽつんと一軒家、2階に行くのも面倒くさくて雨戸は閉めっ放しになるのでしょうか。外ですれ違うのは知らない人ばかりになります。地域の中に入っておくことは、生きるすべです。気づいてからでは遅い。早目に地域の中に入っていきかけを何か示して、あとは自由に任せればいいのか。

前回、ジャンボリーで指導者がいないと言いましたが、子どもだけ行かせて、親は見にも来ないし、送りにも来ない。大規模マンション群に住む30代のお父さん、お母さんを今引っ張り出さないと、あの何千人もの人たちは、二度と地域に入ってくれないと思います。今の30代は、20年後に50代です。定年が延びているとしても、60ぐらいで地域にかかわらざるを得ないので、今、小・中学校に通う子のお父さん、お母さんを何とか取り込んでいく。ビジネスと商業と人の文化みたいなものが融合している武蔵野市で、そういう方々の参加の機会がふえるといいと思う。

ただし、コミセンになかなか人が行かないのと同じで、ちょっとやそっとのプログラムでは絶対来ません。平日に休みをとってでも人が集まるインパクトのあるイベントを実施している例もありますので、行政も、ぜひ魅力あるプログラムを。やりたい方々はたくさんいると思います。そういうところに意識を持っているNPOの支援にも注力していただければと思います。

【I委員】私も妻も両親ともに健在で元気に過ごしています。介護の大変さ、という言葉は知っていても具体的なことはまるで分かっていません。初めて子どもを持つ親にはプレママ、プレパパの事業があ

りますが、介護の予行演習というのはなるほどと思いました。介護の予行を考えたこともなかったですから。要介護になる人が減っていくのがいいという話もありましたが、そういう話もより積極的にしていかなければいけないですね。

重点施策「地域リハビリテーションの推進」に「心のバリアフリーの推進」「テンミリオンハウスの事業の推進」「医療ネットワークの構築」と書いてありますが、できたんですか、できていないんですか、できていないのであれば、どうしてですかということを知りたいです。第五期長期計画は開始して3年目でしょうか、しかし以前の計画からの継続の部分もあると思いますので、なぜできていないのかをもっと市民に向けて示していかないと、余りいいアイデアは出ないのではないかと。市役所の人は、できていないことが悪いみたいに思っているかもしれないけれども、できていないことが問題なのではないか。何でできないのかを考えないことのほうが問題です。それがコミュニティ構想の根本だったのではないかと。そこが変わっていくと、施策ももっと違った面が出てくるのではないかと考えています。

子育てを現役でやっていると、小児科についてです。小児科は、あるように見えて、ない。先生によっては、病気が流行った時のために、予約制にして小さな待合室をいくつか用意し、待合室での感染防止の配慮をしてくれる。でも、それでは儲からないのだろうと思うんですが、案の定、その先生は廃業して大学のほうに引っ張られていってしまいました。こういうことは、行政のほうの知恵もかりなければいけないのかなと思っています。

障がい児については、特別支援学級の数が増えたのは結構なのですが、新しいものをつくるだけではなくて、今ある支援学級を充実させることはできないのかなと思っています。お金のかかる話ばかりで申しわけないけれども、小金井や府中の特別支援学校まで行かなければいけないのではなくて、このまちで生活が営まれていくことが基本だと僕は思っています。大野田小学校は、通常学級とむらさき学級、いぶき学級の動線が分かれていて、一緒にとっても一緒ではない。市内には東幼稚園もあり、そういった研究も進んでいるはずですので、活用していただきたいと思っています。

お父さん、お母さんの引っ張り出しは、仕掛けをつくったところで、どうにもなりません。仕掛けをつくったその瞬間は集まっても、その後でみんなで何か話しながら帰ってくるわけでもない。ふだんから飲みなれているメンバーが「市のイベントにちょっと出ていってみようか」のほうが、順番的にはいい。保育園や幼稚園は一緒でも学校でわかれてしまった保護者が、そこで久しぶりに顔を合わせてつながりが広がっていく。ただ、分断されてしまっている方たちには、イベントも必要です。両面です。最低2つの方策を絶えず同時進行していくのが一番だと思います。

【J委員】私は、武蔵野市の施策は先進的なのだと思っていました。重点施策の「地域リハビリテーションの推進」で、包括的、継続的、体系的支援の仕組みづくりということを掲げています。これはまだ途上とはいえ、非常にすぐれた考え方だと思います。この理念に沿った具体的な事例があるなら、難しい言葉は使わずに、わかるように発信してほしい。実際に、支援の仕組みはできても、本当に必要な人が使えなければ意味がありません。

地域福祉を支えている組織は、コミュニティ協議会、地域社協、市民社協、民生委員、児童委員という仕組みになっていると理解しています。担い手不足の問題も書かれています。私の地区の民生委員さんを見ても、たくさん的人数を抱えていて、1人にかかる負担は非常に大きい。制度と、制度を活用する人をつなぐ組織・人をもう少し充実させていく必要があります。

一方で、説明のあった人口推計は、何もしなければどうなるかというデータですね。今後私たちが武蔵野市をどういう人口推移、年齢構造にしていきたいのかというビジョンをどう置くかということで、

施策も変わってくると思います。20年、30年先の武蔵野市がどうあったらいいのかという観点から、今後の施策のありようを考えてみることも必要です。若年層の人たちが住みたくなるようなまちにしていくためにはどうするのか、高齢者が長く健康で暮らしていけるまちにしていくためにはどうするのか、どういうまちにしていきたいのかという観点で、施策の方向性を精査、昇華させる必要があります。

私自身は、仕事が忙しかったりして、近隣の人との交流がほとんどありません。自宅の前の方と、会えば挨拶をする程度です。コミュニティ構想の資料には、コミュニティセンターが地域課題を発見して、テーマコミュニティをつくり、そのテーマに共感する市民が集まって課題を解決していきましょうと書かれています。協議の場とか活動拠点、交流の場の役割を果たす一方で、遊びや祭り、集会の場としての機能も重要です。近隣の人たちとの挨拶から、もう一步踏み出た交流を推進していく。そのあたりで、コミュニティセンターを活用する形での何かができないか。単に、場をつくりました、来てくださいと言ってもだめです。何らかの施策の介入が必要だと感じています。

地域リハビリテーションの理念には「全ての市民が」とありますが、外国人住民が含まれているのか。外国人住民は、言語文化が違うために、施策の情報も受け取れず、制度もわかりません。災害に遭ったときにも、日本語が通じないことから声もかけられない、ある意味、孤立化していく存在として認識されていません。もし見直されていくのであれば、「全ての市民」の中に、言語文化の異なる人々への配慮を入れた施策をちりばめていただきたいと思います。

(3) 「子ども・教育」分野について

【E委員】今日は陳情の要旨と、保育園増やし隊のアンケートの概要をお配りしました。

まず、保育園増やし隊として「認可保育園をふやし、緊急の保育施設の大幅な拡充に関する陳情」を、2,000筆ほど集めた署名とともに議会に提出し、全会一致で採択をされました。保育園の増設は施策の中でも優先度がかなり高いと思います。不動産情報サイトの住みやすさ調査で武蔵野市が2位に転落したのも、保育園や病院・診療所の数が足りないことがポイントを下げたからです。

保育園の設置は、自治体としての法的義務でもあります。実行されなければ、保護者は仕事をやめたり、転出を余儀なくされます。市民生活に影響するという厳しい生の声が、アンケートに出ています。長期計画には「待機児童解消施策の推進」とありますが、結果的に待機児童はふえています。市は、2010年には、将来人口推計の中で現在の子育て世代の増加を予想していましたが、なぜ対策がおくれてしまったのか、検証して、次の計画にも生かすべきです。

子育て支援のニーズが変化しているという新たな課題もあります。「第三次子どもプラン武蔵野」の「0歳児から5歳児の子育て形態」は平成21年のものです。この後、大型マンションがどんどん建って、新しい家族が入ってきました。ワークショップ速報では、「女性も働きやすい保育サービス」に多くの共感を得ています。政府の意向調査でも、共働き環境の充実を求める声が過半数です。幼稚園は、朝9時に出て、午後は3時に帰宅し、夏休みもとらなければならないため、共働き志向の高い現在の子育て需要の実情には合いません。認可保育園の4歳、5歳枠が定員割れしていますが、これはニーズがないわけではなくて、入ってこれない理由があるのです。子どもは、1年でもどこかの保育園に入れば、そこで子どもたちの関係をつくれます。そこに入るのも、そこから出すのにも、大きなストレスがかかります。

重点施策の「子育てネットワークの多層化」を考える上では、核となる子育て世代の事情や実態、支

援のあり方を丁寧に見て調査し、反映するべきだと思います。

【G委員】私は、武蔵野市は待機児童の問題が話題にもならないからきつとうまくいっているんだろうなぐらいの認識しかなかったので、今日配付された資料を見てびっくりしました。

長期計画という立派なものはあっても、I委員が言ったように、何ができて、何ができていないかわからない。はっきり言うと、心を打たない。フォローもできません。待機児童の比率の目標を掲げて、それをだんだん小さくしていくことを導入したほうがいいのではないかと。

長期計画の31ページの「父母の子育て不安感」では、小学生の親が一番不安に思っているのは「子育ての出費がかさむこと」47.2%となっています。公立の小学校、中学校に行かせておけば安心だと思えば、塾にかかる費用を減らせます。ここに書いてあるのは周辺部分というか特殊なケースで、一番の根幹は、普通の子が普通に教育を受けることです。重要なのは公教育の信頼アップで、基本施策の5が最初に来るのが、僕は一番望ましいと思っています。

市役所側からの異論があることを承知であえて言うと、数値目標として、武蔵野市に住んでいる小中学生全員の数を分母にして、公立小中学校に通っている子どもの数を分子としたパーセンテージが100%に近づけば、武蔵野市の教育行政は合格だという見方もあると思います。

【B委員】僕は、子育てや教育にもっとたくさんの方がかかわるようになっていくのほうがいいのではないかと考えています。

子どもを持つ親御さんは、いろんな悩みがある中で、長期計画の31ページのグラフの2番目にあるように、「子どものしつけに関すること」で悩んでいたります。しつけは家庭の問題と突き放してしまうのではなく、「健康・福祉」分野の話と近づいてきますけれども、一緒に話せる仲間がいることが必要になってくる。そういう部分を、どうサポートするかということになってくると思います。

具体的には、市の方と地域のある種の団体が一緒になって、悩みを持つお母さんたちとのコーディネート機能を担う。人がつながっていく中で力は蓄えられていきます。

もう1つは、学校にかかわる地域の間がふえていくことです。開かれた学校づくり協議会がありますが、学校の先生の邪魔にならない形のサポートとして、教室の中に地域の人がいる、あるいは学童やあそべえに地域の人がいることで、一緒に子どもを育てていく。

特別支援教育も、地域リハビリテーションの考え方で言えば、住んでいるところの小学校に行けたほうがいいのですが、まだ全校ではありません。障害のある子どもたちも、地域で一緒に育てていく形が望ましいと思います。境南町の杵築神社には子どもみこしという企画があります。去年、特別支援学級に通っている子どもたちにも担がせてあげようということで、杵築神社と親と学校が一緒になって、みこしを学校に持ち込みました。地域の人たちと学校とが手をつないでやってあげられることは、いっぱいあります。

遊び場という話が出ていました。境南コミセンは遊び場になっていて、子どもたちは5時になっても帰りません。市有地で、現在使われていない場所を、安全に配慮したしつらえで空き地にして、何とか遊び場にできないでしょうか。

また、小学校高学年から中学校ぐらいになると、性的に違和感があつて、相談したくても、自分からはなかなか言い出せない子どもが出てきます。性同一性障害のような個別の課題を抱えた、マイノリティーと言われる子どもたちにとっても、学校が行きやすい場所になっていくといいなと思います。

【A委員】子育てにしろ、防災にしろ、高齢者のコミュニケーションにしろ、地域で支え合っていくという理想は、確かにあります。かといって、地域の人々がそれにかかわれるほど時間を費やせるかという、それも本当に難しい話です。

「開かれた学校づくりの推進」は、何をもって「開かれた学校」と言うのかわかりません。今は不審者対策で、私の近所の保育園でもセキュリティを強化しています。今の社会状況で「開かれた学校づくり」というのは難しいのかなとも思います。

障害を持っている子どもの話が出ました。「心のバリアフリー」の観点からも、子どものときから福祉活動を授業に取り入れるのはいいことだと思います。健常者の子ども同士で集まって、障害を抱えている子どもですとか高齢者に思いをはせる機会が少ないと、大人になっていざとなると何をすればいいのか、接し方がわからなくて戸惑うことが多くなります。常に同じ教室で学ぶことが難しくても、月に1回でも半年に1回でも、障害児学級の子どもたちと遊びや学びを一緒にしたり、老人ホームでのお手伝いをしてはどうでしょうか。杉並区では、小学校や高校生などが、落ち葉の時期に、課外活動で善福寺公園の清掃をしています。ネット社会で殺伐としている今、人のために何かをしてあげて、感謝されて、認められることが自信につながります。保護者の方からは賛否があると思いますけれども、そうした教育を幼少時代から取り入れることで、心のバリアフリー、地域のコミュニケーション、子どもの人格的な成長を促すことにつなげていければよいのではないかと思います。

【I委員】まず、保育園についてです。僕の子どもは全員保育園でした。僕からすると、この第五期長期計画や第三次子どもプランに認可保育所を整備すると書いてあるのは、隔世の感があります。僕の上の子どもが初めて保育園に入ったころは、武蔵野市の中で認可保育園をふやそうという雰囲気は一つも見受けられなかった。僕は、書かなければいけない具体的な数値を盛り込んでもらうまでに、市民会議のような場に出ていって意見を言ったり、要望書を出したりという働きかけをしてきました。今活動中の方々は驚くかもしれませんが本当に武蔵野市は変わったと思います。だからこそ市には、もうあと1段、2段頑張ってもらいたい。

認可保育所は、単なる保育所ではない。国の基準があって、本当は国がきちんと予算を出さなければいけないのです。ところが、国が出しているのは、認可保育所の運営費の10%にいくかいかないかぐらいです。国の言うことにのっとると、保護者が出す保育料は10万を超えます。僕らは所得に応じて保育料が定まっていますが、その足りない分を全部市が肩がわりしている。職員配置も、国の基準ではゼロ歳児3人に職員1人です。もしその保育園が火事になったら、右手に抱えて、左手に抱えて、残る1人は誰の子どもなんだよという話なんです。また、職員1人で5歳児30人を見られるわけがない。それに対して武蔵野市は職員をふやしています。そのお金も全部武蔵野市からのものです。東京都は、前は出していたのですが、ほぼ出なくなりました。それを考えると、保育園をふやしてほしいという一方で、僕は保護者に覚悟を求めることがある。市が肩がわりと言いましたが、それは皆さんの税金です。僕らは求めるだけのことをちゃんと言っているのかどうなのかというところが大事になります。それでも保育園が必要なんだと言って、初めてきちんと要望していけるんです。

「地域包括ケアシステム検討委員会報告書」は、すごくいいなと思いました。国の制度のおかしな部分をきちんと挙げた上で武蔵野市ではどうあるべきかを考えている。子ども・子育て支援新制度でも、国のやっていることはざっくり過ぎるし、情報を出してくるのが3カ月も4カ月もおくれている。内容も武蔵野市のやり方にマッチするのか疑問です。第四次子どもプランでも、地域包括ケアシステム検討委員会のように国の制度を検証し武蔵野市に合う形にしないといけないと思いますし、策定は長期計

画・調整計画よりも早いですが、つくった後はきちんと検証して、見直していくべきだと思います。

第三次子どもプランは、毎年行政が自己評価しなければいけないことを考えると、もう一段深く進めて数値目標なり、やったことに対しての評価なりを入れていくと、もっといろんな意見も出ると思うので、計画を進行させる上での工夫もしていただきたいと思います。

教育については、今、武蔵野市の放課後施策をどうするかという会議が設置されていますが、先生方はなかなか腹を割ってしゃべってくれない。「塾に行かせていて本当にいいと思っているんですか」とか、学童クラブの宿題のことなど、直截的に聞いたら悪いかと思えば遠慮がちに聞いてしまうためか、回答も回りくどくなってしまって、話が全然進まない。武蔵野市の公教育だけで十分と思えば、塾に行く必要はないじゃないですか。

今回、学校教育のほうも計画が進んでいますけれども、校長先生の意見よりも、現場の先生たちは本当のところはどう思っているのか、武蔵野市はもっと聞き取るべきです。親の意識も変えなければいけない。私立はいい、有名中学に行ければいいや的な発想を全否定はしませんが、武蔵野市の公教育は、私立にも行ける、そうじゃない子たちももっと違う育ち方ができるというのをもっと自信を持ってやっていいと思います。セカンドスクールばかりアピールするのではなくて、根本的にどうしていくかというところはもっと出していいのかなと思います。

地域の方が学校に入ってくるというのは、武蔵野市は本当に難しいと思います。第6期コミュニティ市民会議でも、市民関係そのものがパラパラに離れているという意見が出ていました。つながっているのは、コミュニティ協議会にかかわっている方と、青少協にかかわっている十数%の方だけで、地域コミュニティに参加したいというのも、何かあったときに助けてもらえるからという期待値で言っているところがある。ふだんの参加は期待できないと思っています。でも、そこを変えるのは、僕ら市民の考え方とか、結局コミュニティのところ。自分でつくった計画を自分で達成するんだというモチベーションの持ち方かなと思います。

【C委員】私は子どももいないので、教育のことは一切考えたことがないし、学校の内部がどうなっているかも全然知らない。でも、朝起きて、窓から学校に行っている子どもたちがいるのを見ると、ああいいなどは思います。実際どうすればいいのかも全く考えたことがないですが、子どもがいる環境をつくり続けていかないと、とても暗いところになってしまうという実感はあります。その一方で、いろいろ調べて、実情を知っている方もいて、落差の激しさも感じます。

ただ、親御さんの要望とか、現場の先生がどう思っているかといったことは、長期計画を見ても、よくわからない。親御さんが何を求めているのかのチェックもしていないみたいだし、学校の周りの地域の人たちが学校の安全をどう思っているのかもわからない。関係者の気持ちを吸い上げるようなシステムがあったほうがいいなと今思いました。

【D委員】私は、長期計画 31 ページの登校拒否、不登校の問題が気になりました。今どの小学校も1クラスくらいは学級崩壊寸前というお母様方の話を耳にしたのです。私の弟は、都外の小学校に通っていて、学級崩壊のクラスにいました。翌年違うクラスになったときに、ほかのクラスメイトに追いつくのに苦労していました。そういったクライシスの状況をうまくリカバリーできるシステムを武蔵野市としても用意していればいいのかと思います。

「季刊むさしの 春号」の「むさしの仕事図鑑」は、いいですね。中学生のキャリア教育を通して、社会性が養われます。ただ、その募集をフェイスブックに上げていて、親や地域の人間は、フェイスブ

ックが上がってれば気づきますが、中学生にはLINEのほうがいいのではと思いました。そもそもICTを使った技術は、まだ試行錯誤中なのかなとも思いました。

最後に、健康・福祉に戻ってしまうのかもしれないのですけれども、障害者の方の作業所の補助金中抜き問題がニュースになっていました。補助事業のお金が十全に使われているかどうかの実情について、子どもや障害を持つ人は、なかなか声にしたり、説明したりすることができません。そういった人たちが文化的で健康な人生を送るためにも、しっかりとした市の監査が必要ではないのかと思いました。

【J委員】日本人の人口がどんどん減っていく中で、6年後の2020年のオリンピックを契機に外国人はふえてきます。武蔵野市もグローバル化の波から逃れられないと思います。地域が多文化化していくというベーシックな社会状況を押さえた上で、長期計画を立ててほしいというのが私の願いです。

多言語、多文化化していく社会で、最もはざまに入ってしまうのが子どもです。武蔵野市ではないのですが、外国籍のお子さんが不登校になった件でスクールカウンセラーの方から相談を受けたことがあります。家を訪ねるとお母さんが出てきて、日本の学校の制度がわからないし、自分の国では小学校を出ていれば大丈夫と言う。でも、子どもは、日本で育つ中で、言語は日本語にスイッチしてしまいます。母語教育もなく母国に帰っても、自立して暮らすことができない。子どもの教育の問題、親子間のコミュニケーションギャップの問題、さまざまな問題が出てくるのです。

外国籍の子どもに限りません。外国で長く暮らした日本人の子どもが、帰国して日本の学校に入って、言語的、文化的な差異の中でいじめられるという状況も、私は間々、目にしています。例えば、イギリスから帰ってきたお子さんが、中学校の英語の授業で英語の発音がおかしいと言って、ほかの生徒にいじめられます。そのお子さんは、ほかの生徒の発音をまねてしのぐという現実があるのです。社会では、グローバル人材の育成と言って英語教育に力を入れています。その一方で、こうしたいじめが起こってくる。この状況を改善していく必要があると思います。

長期計画 34 ページの5「次代を担う力をはぐくむ学校教育」の3行目に「自分の考えや意志を表現しながらも他者を理解し受け入れる力を身に付けていく必要がある」と、理念的に書かれています。実態的には、グローバル化していく社会状況を子どもたちが理解していないと、どうしても異なる人たちを排除します。私たちが子どもたちに、言語文化や肌の色、考えの違う人たちがいて社会をつくっていくという認識を醸成していくことは、非常に重要な、大きな問題だと思います。

全てに通底していることですが、理念的にはきれいに書いてあっても、武蔵野市だけのことで施策が閉じられているところに非常に違和感があります。今は共生教育とも言われていますが、そうした教育を通して子どもたちは世界に羽ばたいていく存在であるという視点も、きちんと入れていただきたいと思います。

ちなみに、武蔵野市は四中に帰国・外国人教育相談室があつて、とてもいい活動をされていると聞いています。この施策の中には、そういうことが何も入っていません。いい活動は、きちんとアピールをしていってほしい。いい施策を世界に向けてちゃんと表現していくことで、外国人も武蔵野市にいいイメージを持つと思いますし、その前提として多文化の人々が共生できる社会の実現といっためざすべき方向を記述してほしいと思います。

【F委員】私は、縁がありまして1年間小学校の教員をやっていたので、お話をお伺いして、思うところがたくさんありました。地域の方々と一緒にやっていくことは、僕個人としてはすごくありがたい一方で、仕事がふえるという思いは実際にあります。ただでさえ一日が目まぐるしく過ぎ去る中で、ほか

の人たちとかかわろうとすると、文書を出さなければいけないし、調整が大変なんです。それでも、自分1人じゃなくてもいいんだと思えばいいと思います。地域の人たちと「かかわらなければいけない」ではなくて、「どう助けてもらおうか」に意識が変化すれば大分違うと、教員を離れて思います。

私の働いている杉並では、おじいちゃん、おばあちゃんに、10分でいいから、登校の時間だけでいいので家の軒先でもどこでも出て、子どもたちに挨拶してくれという挨拶し隊みたいなのをつくったそうです。声をかけることで、その地域のおじいちゃん、おばあちゃん、おじさん、おばさんの顔がわかる。嫌がる子どももいるとは思いますが、見守られている感はあると思います。挨拶するほうも、子どもと接することができます。その挨拶運動が波及して、危ない走行をする自転車が減ったり、それまで挨拶を交わさなかったサラリーマンとの挨拶も生まれたりしています。地域活動と言うとハードルが高くなりますが、「ほんの10分でいい」というハードルの低さを出すと、軽いところから始められます。

障害児教育では、動線の分かれている学校が多い気がします。何のために特支をやっているのか。特支学級との交流といっても、ただいるだけの交流もあります。それでは意味はない。障害だからということで子どもたちが嫌悪するのではなくて、何が足りないのかを子どもたち同士で考えながら助け合えるような教育の仕方が、教師の力量によりますが、必要だと思います。

障害児が身の周りにいるというのは、これから先、必ずあります。小さいころから多様性になれる意味でも、動線確保は、まずマストです。3月が終わって4月に教室の位置が変わると大混乱するのですが、やる意味はあると思います。

市では、教員志望の大学生の情報をプールしているのでしょうか。昼間、時間のある教員志望の大学生や、教員志望でなくても子どもたちを教えたい学生、塾講師をやっている人などに来てもらって、マルつけのお手伝いをしたり、子どもたちと触れ合ってもらえれば、教員としても助かるし、教員志望の人たちも、学校の雰囲気や問題点が見えてくるのではないかと思います。

【企画調整課長】 TAという形で入ってもらっているのはあります。

【F委員】 TAとなると、結構ガッチリした制度として入っていますが、ボランティア登録のような形で、放課後の補習に来てもらうというような流れが広がっていくといいなと思いました。

【H委員】 ジャンボリー、セカンドスクールの民泊も含めてパーツごとではよくできている感じがします。ただ、PTAの役員を卒業すると、青少協へ行って、そのままコミセンの役員になるというルートのようなものがある。そうすると、どこへ行っても同じ顔ぶれで、偏ってきます。定年のないお役目の中にはなかなか入れないという実情もあり、仕組みとしてはいいのですが、行き詰まっている感もあります。

先生も、生徒から評価されて大変だろうと思います。校庭で野球をやっていたら、土曜日出勤なさっている先生の影が見えたのですが、顔も出さずに裏から帰ってしまった。残念だなと思う。先生も大変なので、それを引っ張り出すのは大変だというのはよくわかるんですが、そこを何としてでもやっていくのが親の役目だとも思うので、何かいい方法はないかと思っています。

【E委員】 またやっぱり保育園の話になってしまうのですが、コミュニティづくりの核、拠点の1つとして保育園を位置づけることもできると思います。

朝日新聞に「保育園は迷惑施設か」という記事がありました。反対運動の激しいところに保育園がで

きたのですが、園庭を開放したりする中で、地域の人が集ったり、利用する拠点として受け入れられていきました。

現状では、地域の保育園に行くことができなくて、市外の保育園に行ったり、市外から来ている人もいます。保育園に集まっている人はばらばらで、小学校に上がるまでは地域に全く参加しない状態になってしまっています。そこを保育園で何とかつなぎとめて、拠点となって、家庭保育をしている人たちも巻き込んでいくという方策ができないかなと思います。

【I委員】保育園の数に関して、都内各自治体での設置の動きみたいなものを把握していらしたら、次回にでも教えていただきたい。将来計画と、ここ数年間のどこかで区切って、どれだけふやしたのかの実績を。保育園は、ふやして待機児童がゼロに近くなると、さらに入園希望者が来て、また追いつかなくなる。ほかの自治体は果たしてどうしているのか。子どものいないまちになってしまっているのかどうか気がなります。これは基本的には東京都レベル、国レベルでやっていただくことです。武蔵野市だけ保育園に入ることができて、子育てしやすいまちならいいということではない。日本全国どこに住んでもそういうまちであってほしいというのが根本です。だからこそ武蔵野市はそのリーダーシップを切ってほしい。その参考までに、都内の状況を知りたいです。

もう1点は、保育園をコミュニティの場としては使うことができると思うのですが、僕が15年間ずっと気になっているのは、自己完結している親がすごくふえてきたことです。父母会でもPTAでも、「面倒くさい」「負担だから」「子育てしながらなんて、ただできえ働いているのに」と言う。父母会は、子どもたちが子ども同士でいろいろなコミュニティをつくっていくのと一緒にです。親同士がいろいろな作業を通してイベントなどをつくり上げていくのを見て、子どもたちは育つ。大人がしゃべっているから子どもはしゃべるようになるし、大人が箸の使い方を見せるから子どもも全部まねしていく。そういう意味で、先生方とも一緒に親が共同作業をしていくことは大事だと思っています。

そこでできたコミュニティがそっくりそのまま学校に上がっていけるといいなとも思っています。昔は漠然と、12の小学校に24の認可保育園があつて、2つの保育園が1つの小学校に集まっていけば、ふだんからコミュニティの中に入っていることになるのにも思っていた。それができているところもあるけれども、ほとんどは自分だけで育てて、自分だけで苦しんでいる。保育園だけじゃなくて、保護者全体がそんな雰囲気になりつつあるのではないかと思います。

【D委員】保育園がコミュニティセンターの施設を例外的に借りて、お泊まり会をしていました。コミュニティセンター側としては、保育園の公式の行事だと思って長年お受けしていたのですが、よくよく調べてみると、保育園の公式行事ではなくて、保育園の父母の方々の私的行事だったのです。これは、原則論に立ち返ると、私的団体の私的利用だから開館時間外となるコミセン側では受けられないという結論になったことがありました。

コミュニティのところで、保育園だけでなく、外に開いていくのを武蔵野市はどう考えていくのか、ルーリングというか形をつくっていただくと、他の団体や組織も連携を増やしていける部分、連携できない部分がわかりやすいかなと思いました。

【総合政策部長】障がい児の問題について、私の個人的な感想ですが、単純に地元にといいわけにもいかない。医療的なところも検討していかないといけないし、地域の学校で全ての医療の行為も含めてというのはなかなか難しい。地域の学校に入るという基本的な前提はありつつも、専門の医療を受けられ

ることも考えなければいけないと思いました。

4. その他

(1) 次回について

【企画調整課長】次回は7月2日の水曜日、場所は801会議室で、緑・環境の次に、文化・市民生活をお話いただきます。

ありがとうございました。

閉会（午後9時）